

わが子と算数

北海道算数数学教育会
小学校部会 札幌支部
平成11年 3月19日発行

No.93

4年継続研究のまとめにかえて

北海道算数数学教育会

札幌支部副支部長 一ノ関 忠 昭

平成7・8年度は、①子ども理解に根ざした教師の支援と②子ども自身が判断し表現する場の保証、というのが研究仮説で、視点は、①自己決定する子どもの姿、②自己表現する子どもの姿、でした。

ここでは、仮説と視点の関連が見えない点と、問題解決力(学習)の構造が不明確であり脈絡が十分ではないという点からの吟味がありました。

これは、大主題が「子どもをこのように育てたい」とするなら、それに相応しい問題解決力を取り上げ、その構造を明確にした授業のあり方そのものを研究内容(副主題)とし、それを目指した授業の具体策が研究の視点(方法)になってはいないのではということに起因していたからです。

平成9・10年度は、上記の吟味から研究の目的を「問題解決力を高める授業」とし、授業で問われる研究の内容を「自力解決を拡大・充実させる良質な問いへ」と「自力解決の質を高める集団での交流・検討活動」、研究の方法を「良質な問いを醸成し組織化する場の構成」と「交流や検討をせざるを得ない場の構成」、研究を支え深める内容として「根拠ある単元構成」としました。

ここでは、20回余の学年部会と8回にわたる学習会で、様々な成果と課題が示されました。その中から、一つ課題として述べるなら、次のことが言えると思うのです。つまり「授業のあり方」に関してです。教師が提示する「問題」は、授業のきっかけです。本当の子どもの問いではありません。子どもが、「おやっ」「なぜ」と思い(問いの醸成)を生み出す工夫は、どうだったのです

ようか。集団での交流・検討活動では、本当に子どもの思考や表現を舞台にのせたのでしょうか。そして、教師と子ども・子どもと子どものダイナミックなやりとりから「なるほど」「わからないよ」といった、子ども自身の経験をさせていたのでしょうか。ということは、「子どもの問いが深まる支援が授業の鍵であり教師の腕である」ことを実践してきたのでしょうか。子どもに1時間をふりかえって納得や覚醒や確認等々をさせてきたのでしょうか。

また、単元構成では、「こんな力を育てたい」「だからこんな教材化、学習過程、学習形態、学習方法、指導と評価」をしたと主張し合ったのでしょうか。つまり、指導(授業)と子どもの育ちを関連させて論議してきたのでしょうか。

これらが充足されると、会員個人の研究や各学校での研究や、北数教の研究や、学年部会の研究の深化を図ると同時に、子どもが真の学習の主人公となり、互いの算数する姿を共有する姿が実現すると思うのです。更に、教師主導ではなく、子どもの心情までを含めて、「このような子どもを育てたい。だからこんな指導の工夫をし、子どもにさせたいこんな算数的活動を取り入れ、その育ちを個別に見とる」といった、教師の主体性を論駁することができると思うのです。

研究部は次年度の研究の方向を模索し、その一端を本号で提示しています。会員の皆様の英知を結集して、その方向を確かなものになりたいと思っています。子どもが活動する算数のために……。